

香川県立中央病院
臨床研修マニュアル

平成31年4月 (version 1.2)

【目次】

1章：香川県立中央病院の理念と基本方針.....	1
2章：臨床研修病院としての役割と理念・基本方針.....	2
3章：当院の研修システム概要.....	4
4章：研修管理体制.....	6
5章：臨床研修病院としての施設・設備.....	8
6章：医療安全・感染対策.....	13
7章：研修医の募集・採用・修了.....	17
8章：研修医の研修規程.....	20
9章：研修医の処遇.....	22
10章：研修記録の保管・閲覧基準.....	24
11章：研修プログラム等.....	25
12章：研修医の評価.....	30
13章：臨床研修における指導体制.....	32
14章：指導医の評価.....	37
15章：指導者の評価.....	37
16章：研修プログラム全体の評価.....	38
17章：研修修了後の進路等.....	39
18章：協力型臨床研修病院としての研修体制.....	40
附属資料：病院組織図、要綱・規程、名簿、その他の附属資料....	41

1章：香川県立中央病院の理念と基本方針

I 香川県立中央病院の基本理念

私たちは、香川県の中核病院として安全・安心な医療を提供し、県民や地域医療機関から信頼される病院を目指します。

II 香川県立中央病院の基本方針

1. 私たちは、患者さんに対し十分な説明と同意のもとに医療を提供するとともに、診療情報を積極的に開示し、患者さんの権利を尊重した医療の提供に努めます。
2. 私たちは、医学・医療の研鑽に励み、県民の健康・福祉の向上に努め、とりわけ県の基幹病院として急性期医療に機能を特化し、高度医療や重症患者を中心に受け入れる三次救急医療に重点化します。
3. 私たちは、県内医療機関との連携及び機能分担を推進し、地域医療の充実に努めます。
4. 私たちは、医療従事者の研修・養成の場としての役割を果たし、地域医療に必要な人材の確保に努めます。
5. 私たちは、公共性と経済性を考慮し、健全な病院経営に努めます。

2章：臨床研修病院としての役割と理念・基本方針

1. 臨床研修病院としての役割

香川県における公的中核病院として質の高い医療を県民に提供するとともに、広く社会の医療福祉に貢献できる人材を育成します。

2. 研修理念

香川県の公的中核病院での研修を通して、医師としての人格を涵養し、医学及び医療の果たすべき社会的役割を認識しつつ、将来専門とする分野に関わらず臨床に必要な基本的診療能力（態度、技能、知識）を習得し、遭遇しうるいかなる状況においても適切な全人的医療をチームのメンバーと協力しながら提供できる医師を目指します。

3. 基本方針

次のような資質を備えた医療人を育成する。

① 人間性豊かな医療人

幅広い教養を持った感性豊かな人間性を備え、深い洞察力と倫理観、生命の尊厳について適切な理解と認識を持つ。基本的人権の尊重に努め、自らはプロフェッショナルの一人である責任を自覚する。

② 医療全般にわたる広い視野と高い見識を持つ医療人

医学、医療の全般にわたる広い視野と高い見識を持ち、常に科学的妥当性に基きながら、将来専門とする分野に関わらず臨床に必要なプライマリ・ケアの基本的診療能力（態度、技能、知識）を習得する。

③ 患者の立場に立った医療を実践する医療人

医師としての人格を涵養し、患者から人間としても信頼される思いやりの心を持った謙虚な医療人となり、患者と一体となって、患者中心・患者本位の全人的医療の推進に努める。患者の人格と権利を尊重する。

④ チーム医療のできる医療人

自己の能力の限界を自覚し、病院内の各職種・各職員と連携を密にし、チーム医療の推進に努める。また、将来はチーム医療のコーディネーターとして責任ある行動を行う。

⑤ 生涯学習をする医療人

質の高い医療が提供できるよう、生涯を通じて教育・学習を続ける態度と習慣を有し、高度の医療技術の修得に努める。後輩を育成することによって、自らが学ぶ姿勢を有する。

⑥ 地域医療に貢献する医療人

地域医療に関心を持ち、健康の保持、疾病の予防から社会復帰に至る医療全般の責任を有することを自覚し、行動する。

⑦ 公的中核病院としての責務を自覚する医療人

医療の公共性を理解し、全体の奉仕者として、常に公平な職務の執行に当たる。

4. 臨床研修病院としての特徴

- ・ 当院は、香川県の中核病院として、一般医療のほか、高度・特殊・先駆的医療をはじめとする医療を提供するとともに、救命救急センターや臨床研修指定病院、災害拠点病院、地域がん診療連携拠点病院、肝疾患診療連携拠点病院、へき地医療支援センターなどとして、県民医療の確保や地域の医療水準向上に大きな役割を果たしている。中でも、救命救急センターは、重篤な傷病者に対する救命医療を24時間体制で提供している。まさに県民医療における最後の砦の役割を担っている。
- ・ 基幹型臨床研修病院として、協力型臨床研修病院や臨床研修協力施設と共に臨床研修に積極的に取り組んでおり、各分野に **common disease** から希少な疾患に至るまで多様な患者さんに対応できる人材と医療資源が整備されている。
- ・ 救急医療は三次救急だけでなく、一次、二次救急も受け入れており、**common disease** のプライマリー・ケアから高度集中治療が必要な疾患の診療まで豊富な臨床例を経験できる。
- ・ 昭和48年に臨床研修指定病院に指定されて以来約40年間にわたり、岡山大学、香川大学、自治医科大学をはじめ、多数の臨床研修医、医学生の教育に関わってきた実績があり、新医師臨床研修制度においてもそのノウハウが生かされている。
- ・ 臨床診療能力、指導能力の高い医師が多数在籍しており、日常の臨床指導に加えて、多数の院内カンファレンス、レクチャー、院外研修、**ICLS** 研修(院内)などが行われている。
- ・ 毎月開催される卒後臨床研修センター実務部会には、臨床研修医の代表者も参加して、臨床研修運営の細かな調整や管理が行われている。その結果は必要に応じて上部組織である卒後臨床研修センター運営委員会、研修管理委員会に諮られるシステムになっている。
- ・ 本研修プログラムを修了した研修医は、当院の後期臨床研修プログラムに進むことができる。また、特に優秀な医師は、後期臨床研修修了後に正規職員として採用している。

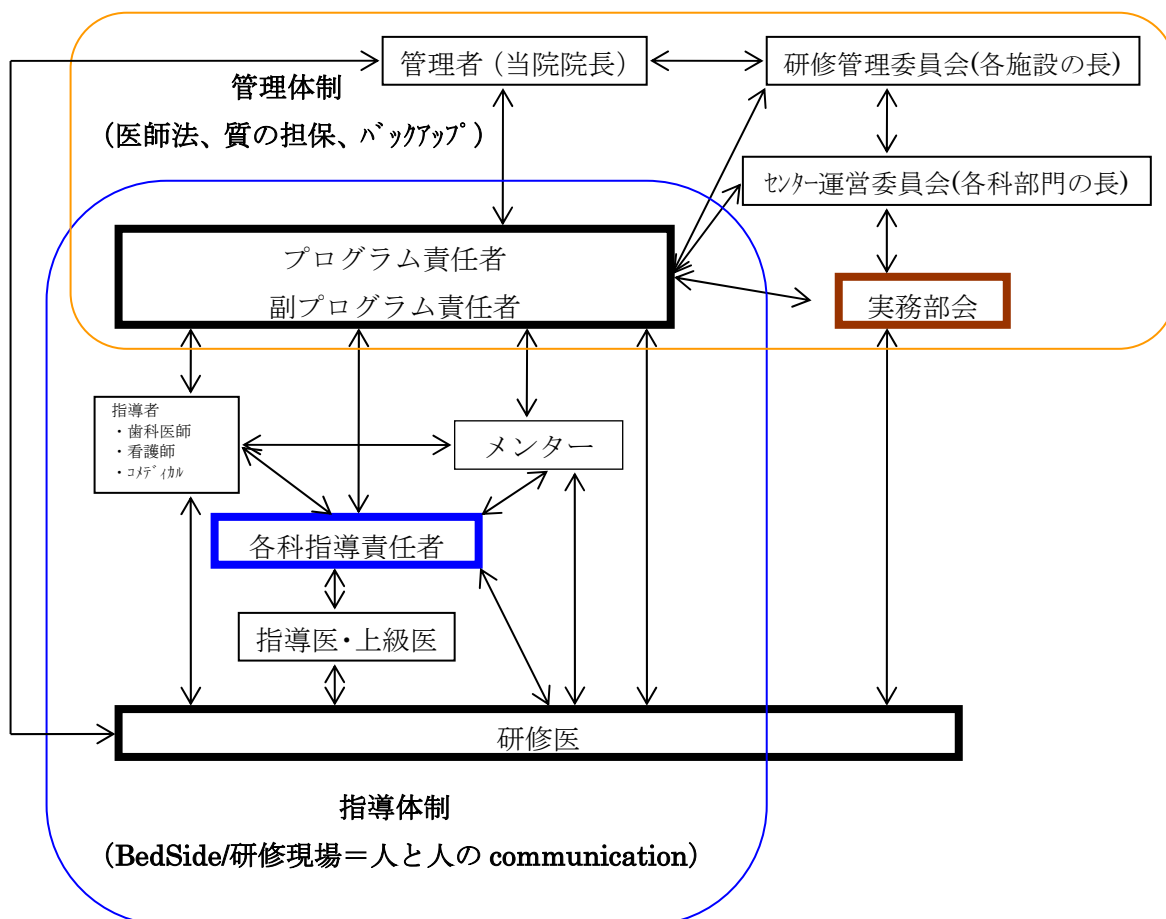
5. 臨床研修病院としての役割と理念・基本方針の見直し

定期的に自己評価、外部評価がなされ、見直しと修正が行われている。

[→「4章—5 評価と検討（見直し）」も参照してください。]

3章：当院の研修システム概要

研修システム 概念図



【解説】

管理体制の重要な役割は以下の3点である。

- ① 医師法に基づいた2年間の研修プログラムが実施されるよう管理すること。
- ② 研修プログラム、実際の研修内容の質を担保し、質の高い研修医を育成すること。
- ③ 研修が効果的に行われるよう指導体制をサポートすること。

指導体制の中で最も大切なことは、「人と人の活発なコミュニケーション」である。研修医、指導医・上級医、メンター、指導者、プログラム責任者など各間の様々な相互コミュニケーションが活発に行われることが望まれる。

【各部門の概説】

[→各部門の詳しい役割は「13章—12「指導体制における各部門の役割」参照]

☆プログラム責任者、副責任者：プログラムに関する統括、調整。

☆管理体制

①研修管理委員会

臨床研修施設等責任者も含めた、研修プログラムの全体的な管理等を審議する。

②卒後臨床研修センター運営委員会

初期臨床研修医は、2年間「卒後臨床研修センター」に所属する。本運営委員会は、プログラム責任者、各診療科責任者、各コメディカル部門責任者、事務部門責任者、研修医などから構成され、研修プログラム等に関し、院内で審議を行う。卒後臨床研修センター運営委員会の決定事項は研修管理委員会へ報告し、必要な事項は審議に付する。

③卒後臨床研修センター実務部会

プログラム責任者、中堅指導医、研修医、コメディカルスタッフ、事務担当者で構成される。プログラムが円滑に実施されるよう情報交換し、細かな調整、管理を行う。卒後臨床研修センター実務部会の決定事項は卒後臨床研修センター運営委員会へ報告し、必要な事項は審議に付する。

☆指導体制

①各診療科指導責任者

各科における研修指導の要であり責任者。必ずしも各科の診療責任者と同一者ではない。

②メンター（任意）

研修医の具体的な将来像を考えながら、適した研修ができるよう導く相談者。

希望者は実務部会へ申し出てください。

③指導医、上級医

実際の指導を行う医師

④指導者（歯科医師、看護師、コメディカルスタッフ）

医療従事者の先輩として研修医に助言、指導を行う。コメディカルスタッフの立場から、研修医、指導医の評価を行う。

4章：研修管理体制

卒後臨床研修の管理は研修管理委員会が行い、研修医の所属する卒後臨床研修センターの円滑な運営を図るため、卒後臨床研修センター運営委員会を置く。また、当該運営委員会の業務を円滑に行うため、研修医を含めた卒後臨床研修センター実務部会（以下「実務部会」という。）を設置する。実務部会は卒後臨床研修センター運営委員会の下部委員会、卒後臨床研修センター運営委員会は研修管理委員会の下部委員会として位置付けられ、下部委員会における決定事項は、それぞれの上部委員会である卒後臨床研修センター運営委員会、研修管理委員会に報告し、必要な場合は審議に付する。

1. 研修管理委員会

- ・ 年1回、3月頃に定期開催している。プログラム内容の変更等、必要に応じて随時開催されるが、それほど重要でない討議事項は、適時、E-mail等によって委員間の報告・連絡・相談が行われている。
- ・ 委員は、管理者（院長）、臨床研修協力施設等の実施責任者、プログラム責任者、コメディカルスタッフ代表者、学識経験者、研修医の代表者などで構成される。
- ・ 研修プログラムに関するあらゆる事項について審議する。

〔→附属資料参照 [名簿](#)、[規程](#)〕

2. 卒後臨床研修センター運営委員会

- ・ 実務部会での決定事項の報告・審議のため、毎月開催される。
- ・ 研修管理委員会の院内委員会に相当し、院長、副院長、各診療科の責任者、各コメディカル部門の責任者、プログラム責任者等で構成される。
- ・ 研修プログラムに関するあらゆる事項についての院内合議のための委員会であるとともに、決定事項を各科各部門に周知するための委員会でもある。
- ・ 委員として研修医1名が参加している。なお、この1名は毎月開催される病院の運営委員会にも委員として参加している。

〔→附属資料参照 [名簿](#)、[規程](#)〕

3. 実務部会

- ・ 毎月1回、定期開催している。加えて必要時には随時開催される。
- ・ 卒後臨床研修センター運営委員会の下部組織で、プログラム責任者、指導医代表者、研修医代表者、コメディカルスタッフ代表者、事務担当で構成される。
- ・ プログラム責任者に協力しながらプログラム管理・運営の実務を担っている。

〔→附属資料参照 [名簿](#)、[規程](#)〕

4. 外部評価のしくみ

- ・ 研修管理委員会に外部委員として、県医師会推薦者を含む医師3名と医師以外の有識者

2名が就任している。この5名から、当院の臨床研修病院としての理念、基本方針、募集、採用計画、管理・指導体制、プログラムなどに対して、評価と助言を受けている。

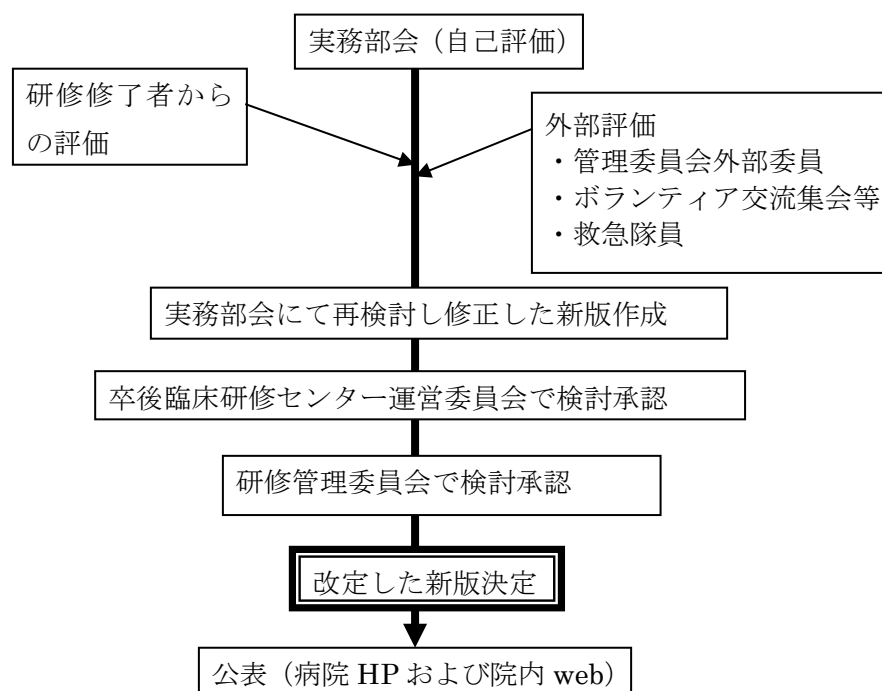
- ・ ボランティア交流集会等において、一般の代表者から、当院の臨床研修病院としての理念、基本方針、募集、採用計画、管理・指導体制、プログラムなどに対して、評価と助言を受けている。
- ・ 救急隊員から臨床研修病院としての役割と理念・基本方針や研修医について、評価と助言を受けている。

5. 評価と検討（見直し）

以下の事項について、年1回定期的な評価と検討（見直し）を行う。

- ①臨床研修病院としての役割、理念、基本方針
- ②研修プログラム全体
- ③研修医募集・採用計画
- ④その他必要と認められる事項

*評価と検討（見直し）の手順



このほか、NPO 法人 卒後臨床研修評価機構 による外部評価を受け客観的な見直しを行う。

5章：臨床研修病院としての施設・設備

1. 部門別研修

(1) 外来研修

ア) 総合診療内科：内科総合診療外来にて担当医師と共に初診外来の研修を行う。

外来担当医師の監督下に診察を行う。

診察症例について、外来担当医師とディスカッションを行う。

イ) 各科：可能であれば各科の初診、再診患者の診察を研修する。

診察症例について外来担当医師とディスカッションを行う。

(2) 救急医療

- ・ 研修医は、一般的な疾患を中心に一次から三次までの救急を研修する。
- ・ 平日の日勤帯は、①救急担当医、②救急部所属研修医が担当し、各診療科がオンコールでバックアップしている。
- ・ 夜間・土日祝日は、①管理当直医 1 名、②内科系当直医 1 名、③外科系当直医 1 名、④循環器系当直 1 名、⑤研修当直医 2 名の体制となり、このほか麻酔科 2 (-1)名が ICU 当直をしている。各診療科がオンコールでバックアップしている。
- ・ 研修医当直の割当は、総務企画課事務担当者が原案を作成し、診療部長の承認を得る。事務担当者は、研修医、実務部会、プログラム責任者、診療部長などと相談しながら、無理のない原案を作成するよう努める。
- ・ 基本的に 1 年次研修医、2 年次研修医がペアで当直に当たるが、研修医当直は労働性よりも研修性を重視しているため、当直が 1 年次、2 年次のいずれか 1 名になっても差し支えない。**研修医 1 名あたりの日当直回数は月に 4 回程度とし最大でも月に 6 回までとする。**
- ・ 看護師、放射線技師、臨床検査技師、薬剤師が当直し、放射線検査、血液生化学検査、生理学的検査、緊急手術、緊急カテーテル検査などは 24 時間可能である。
- ・ 毎月、救命救急センター・救急部運営委員会が開催され、患者統計、運営状況、現場での問題点などが報告討議され、フィードバックされている。

(3) 各診療科病棟研修

- ・ 経験目標（手技、症状、疾患など）は、漏れがないよう各研修科で分担を決めている。
- ・ レポート症例は、各診療科で分担する。研修医は、診療内容などについて指導医と十分に議論し、病理結果、画像診断結果などの不明点は病理医、放射線科医の意見を聞いた上で、考察を行い完成する。書式（フォーマット）は日本内科学会認定医用とし、原則として、1 症例 1 レポートとしている。研修医は完成したレポートを EPOC に PDF 形式でアップロードする。担当指導医は、EPOC 上でレポートを検討し、修正すべき点、更に考察すべき点、追加情報などを研修医にフィードバックする。また、評価判定を EPOC に入力する。

(4) 臨床病理検討会（CPC）

- ・ 病理解剖は、原則 24 時間体制で実施し、可能な限り研修医も参加する。

- ・ CPCは担当研修医を中心に、担当病理医、主治医、研修医、指導医、近隣の医師、中央検査部職員などが参加し、毎月開催されている。
- ・ 研修医のCPC出席は、必須である。
- ・ 研修医は、CPCで担当した症例の臨床病理学的内容について、病理医、主治医と十分に議論を行うとともに、考察し、その結果をCPCレポートとして完成し、提出する。

(5) 地域保健・医療研修

協力型臨床研修病院及び臨床研修協力施設において、1か月間の必修研修を行う。地域（へき地又は島しょ部）における実地医療と併せて地域保健も研修する。

2. 患者の診療に関する情報の管理

(1) 診療情報管理室のHistoryと機能

- ・ 患者の診療に関する諸記録を管理する部門として、昭和46年1月に病歴室が開設された。平成14年4月に診療録管理室に名称変更、平成20年4月に診療情報管理室に名称変更、改組された。
- ・ 診療情報管理室は、診療情報管理室長（副院長）、同副室長（医事課長）の下で、12名の診療情報管理者（11名が「診療情報管理士」有資格者。1名は受講中。）が配置され、4つの業務を専任で管理している。

【1F】

①DPC/PDPS（DPCコーディング・様式1チェック、パス分析等）…………… 5名

【3F】

②診療情報管理（診療記録の質的・量的点検、退院時サマリー・看護サマリー・委譲者オーダ承認・研修医カルテ承認・手術記録の督促、カルテ開示、情報提供等）…………… 4名

③がん登録（院内・全国）…………… 2名

④AIS/外傷患者登録…………… 1名

(2) 診療に関する諸記録の管理

- ・ 1患者1ID番号1診療録の考え方により、患者情報は一元化されている。
- ・ 平成19年7月に電子カルテシステムが導入され、診療情報の保管形態は、以下の3形態を原本としている。
 - ①電子カルテで電子的に保存
 - ②紙媒体で記載し電子化して保存（平成26年3月～）
 - スキャンした文書毎に、タイムスタンプ・電子署名を自動的に付与後、「文書管理システム Medoc（メドック）」（e-文書法、平成17年施行）で保存後、紙媒体は6ヶ月保管後廃棄している。
 - ③紙媒体で保存
 - 院内からの診療情報提供書等は、「地域連携ネットワークシステム Human Bridge（ヒューマンブリッジ）」で電子化後、e-文書法に対応していないため、紙媒体で保存している。
- ・ 電子カルテシステム導入前及び平成26年3月以前の同意書や外注検査結果等の紙媒体は入院、外来ともに11Fカルテ庫（一部、丸亀病院で保管^{*1}）で中央管理されており、タ

イメージな提供が可能である。

紙媒体が必要な際には、診療情報管理室（3F、内線 2120）へ連絡し、貸し出しを受ける。または、診療情報管理室（3F）に設置している閲覧コーナーで閲覧することもできる。

※1 丸亀病院保管分については、緊急時を除き、原則週 1 回（水曜日）の搬送としている。

- 患者紹介または学会・研究用の画像データ（放射線・内視鏡・生理検査）抽出は、電子カルテの「画像管理」より医師がオーダー後、データ入出力管理室（1 階医事課内、内線 2126）より CD-R で提供される。依頼に当たっては、「香川県立中央病院情報システム管理規程」に則って、個人情報利用申請※2 を行わなければならない。

学会・研究用で USB フラッシュメモリー※3 による提供を希望する場合や、その他自科検査の画像抽出は、医療情報管理室（内線 4040）へ依頼する。依頼に当たっては、上記同様、個人情報利用申請※2 を行わなければならない。

診断名・手術名はコード化（ICD-10、K コード）されており、検索は容易に可能である。

診断名・手術名や担当患者一覧等の抽出は診療情報管理室（3F）にて行う。依頼に当たっては、上記同様、個人情報利用申請※2 を行わなければならない。

※2 ①学会・研究用・・・「情報システム内情報抽出依頼書」（様式 6）

②患者紹介用・・・「情報等提供依頼書（医療機関等への紹介・サントビネ用）」（様式 7）

③院外持出用・・・「情報の院外持出等申請書」（様式 8）

※3 病院が管理する暗号化機能付き USB フラッシュメモリーでセキュリティスキャンを実施したものに限り。

- 退院時サマリー（以下、「サマリー」）は、病院全体で統一した形式により作成する。サマリー作成率は、最終責任者の承認※4 を得たサマリーについて算出し、退院後 1 週間以内 100% を常に目指す必要がある。病理検査の結果が判明していないために完成できない場合は、「結果未」として作成・承認を得、判明した時点で追記し、再承認を得る。なお、承認後に追記する場合は、ロック解除するために、診療情報管理室（内線 2120）へ連絡する。

※4 研修医（初期・後期）が作成した場合は、診療科長等が承認する。6 年目以上の医師・歯科医師が作成した場合は、各自が承認する。

（3）研修医の記録と指導体制

- 診療記録は、「診療録等記録マニュアル第 3 版」に則って記録する。
- 研修医には専用 ID が付与され、全診療科の内容閲覧、カルテ記載、オーダーが行える。ただし、研修医は、ログイン時に「担当指導医を選択」した状態で、カルテ記載及びオーダーをする。その際には、「研修医が単独で行ってよい処置、処方基準」を参考にする。
〔→附属資料参照 **研修医が単独で行ってよい処置、処方基準**〕
- 研修医は、病歴・手術の要約、サマリー、入院診療計画書・退院療養計画書、各種診断書（死亡診断書含む）・証明書、紹介状・返書を積極的に作成する。
入院診療計画書・退院療養計画書は、必ず指導医・上級医との連名で作成する。
各種診断書（死亡診断書含む）・証明書は、研修医単独で作成・発行することができるが、作成後、指導医・上級医に連絡し、確認を依頼する。指導医・上級医は内容を確認し、不備があれば指導する。さらに、最終確認後、診療録（プログレスノート）にその旨を記録

する。

- ・ 指導医・上級医は、研修医のカルテ記載及びオーダーに問題がなければ、電子カルテ上で速やかにカウンターサイン（承認）する。追記や内容修正など指導やコメントが必要な場合は、「差し戻し」し、「コメント機能」を活用して指導内容を記録する。
- ・ 診療録（プログレスノート）に直接、指導内容を記録する場合は、研修医の診療録（プログレスノート）に追記するのではなく（直接追記すると記録者が変更されるため）、新たな診療録（プログレスノート）を作成して記録する。指導医・上級医の入力日が研修医の入力日と異なる場合は、どの記録に対しての指導内容かがわかるように記録する。
- ・ 指導医・上級医が「差し戻し」をすると、研修医へは To Do（青鬼）メールが送信されるので、研修医は必ず確認し、記録の修正・追記をする。
- ・ 研修医は、指導医・上級医と患者の診断、治療に関する議論を行った場合、あるいは指導を受けた場合は、それが分かるような記録を心がける。「コメント機能」による指導を受けた場合は、研修医も「コメント機能」を使った対応（問答）が必要である。
- ・ 研修医の記録は、多職種（診療情報管理委員会委員）による質的監査（年 6 回）が行われる。監査対象の診療記録は無作為に抽出され、対象となった研修医へは、実施前にその旨を通知し、許可を得る。監査実施後には、その結果を報告する。

3. 診療の Quality を支える院内チーム

下記のうち、研修医は、医療安全対策及び院内感染対策に参加し、その他のチームにも自分の担当患者がチームの治療対象となった場合を中心に適宜参加する。

- ・ 医療安全対策：*改めて「6 章 医療安全・感染対策」で解説する。
- ・ 院内感染対策：*改めて「6 章 医療安全・感染対策」で解説する。
- ・ 栄養管理：Nutrition support team NST、嚥下ケアチーム（言語療法士など）、口腔ケアチーム（口腔外科医、口腔外科看護師など）
- ・ がん診療：がん診療委員会、Cancer Board、がん化学療法レジメン委員会、緩和ケアチームなど
- ・ 理学療法：理学療法チーム、褥創対策チーム
- ・ 地域連携：地域連携室、地域連携推進委員会など
- ・ その他：倫理委員会、クリニカルパス委員会、災害医療チーム、移植チームなど

4. 研修をサポートする設備（「9 章 研修医の処遇」も参照してください）

（1）研修医室

- ・ 3 階に、20～26 名の研修医を受け入れる面積と機能を有した研修医室を設置している。
- ・ 個人用の机と書棚を設け、共用でインターネット使用が可能なコンピューター及びプリンターを設置している。

（2）研修医仮眠室

- ・ 研修医室内に仮眠室を用意している。

（3）臨床技術研修室（トレーニングラボ）

- ・ 防災棟に設置しており、30 名程度の実習及び講義ができる。研修医のほかに院内職員、

学生等を対象とした講習会に使用している。

〔→附属資料参照 [設置規程](#)、[利用規定](#)〕

(4) 図書室、文献検索、医療情報

- ・ 図書室は、24 時間利用可能である。
- ・ 文献検索は、「Medline」と「医学中央雑誌電子版」が図書室と研修医室において利用できる。図書室には多数の定期購読雑誌があるが、院内にない文献の一部は図書室の司書を通じて近隣の図書館（室）から取り寄せることができる。
- ・ EBM に基づいた最新の医療情報を「DynaMed Plus」によって検索することができる。
- ・ 電子カルテの端末により「今日の診療 web 版」が利用できる。
- ・ 研修に必要な参考図書や雑誌は、実務部会を通じて図書委員会に申請し、承認が得られれば購入できる。長期貸出しによって、購入図書の一部を研修医室内で保管することも可能である。
- ・ ビデオ教材やマルチメディア教材は、図書室管理のものと各診療科保有管理のものがあり、いずれも利用できる。
- ・ 院内雑誌「香川県立中央病院医学雑誌」を年 1 回発行しており、研修医に論文投稿を奨励している。

(5) カンファレンス室、事務機器など

- ・ 共用のカンファレンス室が医局にあり、院内 web により予約できる。
- ・ コピー機は、医局室にあるものを使用できる。
- ・ プロジェクターは、各診療科（内科、外科など）や各部署（総務企画課、業務課、看護部、中央検査部、薬剤部など）が保有しているものを利用できる。

(6) 研修医宿舎

- ・ 病院敷地内に研修医公舎を用意している。

6章：医療安全・感染対策

1. 安全管理体制

平成12年7月、「医療事故防止委員会」が設置され、ニアミス報告制度を設けた。平成14年5月に「医療安全推進委員会」に名称を変更、平成15年4月に医療安全管理室を設置し、専従の医療安全管理者を配置した。

医療安全は、医療の質に関わる重要な課題である。安全管理体制を院内に根付かせ、機能させることで、院内の安全文化の定着と熟成、医療の質の向上と安全確保を図っている。関連したマニュアル、規定には医療安全推進指針、医療事故発生時対応マニュアル、医療事故発生時の対応フローチャート、医療安全推進委員会規程、医療安全管理室規程がある。

[組織体制]

(1) 医療安全推進委員会

- ・1ヶ月に1回、定期開催している。
- ・医療安全対策の検討及び推進、医療安全推進に役立つ情報の収集及び情報交換、医療事故の原因分析及び対策などを行い、医療安全の総合的な推進を図っている。

(2) 医療安全管理室

- ・平成15年4月に医療安全対策を専門に所管する部署として新設され、医療安全管理者である専従の看護師が配置されている。組織横断的な医療安全管理の実務を行っている。
- ・インシデント事例等の情報の収集及び対策立案、医療安全推進のための教育及び研修、医療安全に関する啓発及びマニュアル作成などを行っている。

(3) 医療安全推進者（セーフティマネージャー）

- ・各診療科、各部署、各病棟などの部署ごとに配置されている。
- ・医療安全に関する事項の周知徹底、インシデント事例の報告の促進及び対策の検討、医療器材・機器及び診療材料の安全管理の推進を行っている。

(4) 安全推進専門委員会

- ・関連した各部署のセーフティマネージャー（前述）が集まり、安全推進専門委員会を構成している。各部門別に定期的で開催されている。
- ・各部門内での課題について具体的な対策を検討し実施する。また当該委員会では解決できない問題等について、医療安全推進委員会へ提案している。

[医療事故への対応]

- ・医療安全にかかる規則・マニュアル集の「医療安全推進指針：第6 医療事故発生時の対応」及び「医療事故発生時対応マニュアル」を理解するよう、日頃より院内職員に広報している。
- ・医療事故が発生したときは「医療事故発生時対応マニュアル」及び「医療事故発生時の対応フローチャート」に基づいて行動する。

*特にレベル4・5の場合は次のように対応する。

- ①患者の救命処置を最優先とし、コードブルーによる応援を求め、治療努力を行う。
- ②研修医は、指導医と研修診療科の医療安全推進者へ報告する。

- ③指導医は、速やかに各安全推進専門委員会委員長及び医療安全管理者に報告する。
- ④事故に関係した機器・医療材料・薬剤の現状を保全する。
- ⑤複数の職員で事実と時間経過を確認し、時系列に記録する。
- ⑥事故発生報告に記載する。

*研修医が医療事故を起こした場合の対応について

①指導医への報告（安全管理）

- ・研修医はすぐに指導医（研修診療科、日当直時の場合は日当直医）へ報告する。
- ・指導医は上記の医療事故発生時対応マニュアルに沿って研修医とともに事故対応を行う。

②プログラム責任者への報告（教育、精神的ケア）

- ・研修医は事故状況をプログラム責任者へ報告する。
- ・プログラム責任者は事故の状況を把握し発生原因を分析する。
- ・指導医の指導体制に問題があった場合には、指導医、指導科へフィードバックを行う。また、病院の制度・管理システムに問題があった場合にはその修正を検討する。
- ・研修医の行為に問題があった場合には、研修医へフィードバックを行う。
- ・当該研修医、当該指導医については事故後の精神的ケアについても配慮する。

〔研修医の役割と参加〕

（1）研修医の役割

- ・研修医は、インシデント事例を積極的に報告する。
- ・研修医に特定されるインシデント事例については、医療安全管理者、プログラム責任者とともに再発防止策について検討する。
- ・院長から任命をうけた研修医は、医療安全推進者になるとともに、医療安全推進委員会に参加する。

（2）講義・研修への参加

- ・研修医採用時オリエンテーションで「医療安全」の講義に参加する。
- ・CVトレーニングに参加する。
- ・医療安全に関する講演会・研修会に参加する。

2. 感染管理体制

感染対策委員会が毎月1回開催され下記の事項について討議決定される。感染対策室は感染対策の実務を所掌し、感染制御チーム（ICT）や抗菌薬適正使用支援チーム（AST）や看護部リンクナースと協力しながら情報の収集と提供、委員会決定事項の周知徹底、感染対策及び抗菌薬適正使用に関する助言・指導などを行っている。また、インフルエンザの流行など感染リスクが高まった時には必要に応じて専門部会を設け対策にあたっている。関連したマニュアル、規定には感染対策マニュアル、感染対策委員会規程、感染対策室規程、抗菌薬使用指針、周術期抗菌薬使用指針がある。

〔組織体制〕

(1) 感染対策委員会

- ・毎月 1 回、定期開催される。院長、副院長、院長補佐、感染制御医、感染症科医師、看護部長、薬剤部長、中央検査部長、事務局長、感染管理認定看護師などにより構成される。
- ・院内感染に関する情報の分析・評価、薬剤耐性の動向その他 院内感染防止の調査・研究に関する事項。感染症患者及び健康保菌者等の取り扱い、滅菌及び消毒、清潔区域及び医療材料の清潔保持、その他 院内感染防止のための予防策の立案に関する事項。抗菌薬の適正な使用に関する事項。院内感染防止マニュアルの作成及び職員の教育、指導に関する事項。その他院内感染対策に必要な事項を所掌している。

(2) 感染対策室

- ・毎月 1 回、感染対策室会議が定期開催される。感染制御医を含む医師数名(研修医含む)、歯科医師、副看護部長、感染管理認定看護師、臨床検査技師、薬剤師、管理栄養士、などにより構成される。
- ・院内感染の実態把握に関する事項。院内感染に係る情報提供に関する事項。院内感染の制御、診断及び治療に関する指導・助言。医療従事者の院内感染防止対策の推進を図ること。その他院内感染対策に関することを所掌している。

(3) 感染制御チーム (ICT)

- ・週 1 回、カンファレンス・ラウンドを行っている。感染制御医、感染管理認定看護師、薬剤師、臨床検査技師などにより構成される。
- ・院内感染事例、院内感染の発生率に関するサーベイランス等の情報を分析・評価し、院内感染の増加を確認した場合には病棟ラウンドの所見及びサーベイランスデータ等をもとに改善策を講じる。
- ・また、各部署における感染対策の実施状況の把握および指導も行うとともに年 2 回以上、感染対策に関する研修を実施し、教育・啓発を行っている。

(4) 抗菌薬適正使用支援チーム (AST)

- ・感染症科医師、感染管理認定看護師、薬剤師、臨床検査技師により構成される。
- ・感染症科診療および血液培養陽性患者・薬剤耐性菌検出患者等の抗菌剤適正使用に関する指導・助言を行っている。
- ・抗菌薬治療の最適化のために、モニタリング対象を設定のうえ、抗菌薬の種類や用法・用量、治療期間が適切かモニタリングし、主治医へのアドバイスやラウンドを行っている。
- ・また、最新の情報を職員へ提供するとともに、年 2 回以上職員研修等を実施し教育・啓発を行っている。

〔研修医の役割と参加〕

(1) 研修医の役割

- ・院長から任命をうけた研修医は、感染対策室メンバーとして活動する。感染対策室に参加する。
- ・研修医は受け持ち患者で感染管理上重要な感染が発生した際には、感染対策委員または

感染対策室員への報告を行う。

- ・研修医は自らが感染に罹患し、院内感染の原因になる可能性が発生した際には、感染症科医師、感染対策委員、感染対策室員、プログラム責任者、指導医のいずれかへ報告を行う。

(2) 講義・研修への参加

- ・研修採用時オリエンテーションで「院内感染」に関する講義に参加する。
- ・院内感染対策に関する講演会・研修会（院内研修会が年2回あり）に参加する。

3. 医療安全に関する患者相談窓口

病院玄関横にある8番窓口の地域連携室が患者相談窓口となっており、医療安全に関する相談も受け付けている。医療安全に関する相談案件は医療安全管理室に報告され、患者・家族への対応が行われる。

7章：研修医の募集・採用・修了

1. 募集

(1) 公募

- ・ 医師臨床研修マッチング協議会主催のマッチングシステムに参加する。
- ・ ホームページ（病院、マッチング協議会など）、パンフレット（香川県）、説明会（香川県、民間会社などが主催）などで広報している。

(2) 自治医科大学卒業生

- ・ 公募以外に香川県出身の自治医科大学卒業生を受け入れている。
- ・ 学生は、当院、香川大学医学部附属病院及び三豊総合病院のいずれかを選択し、当院を選択した場合には、当院で研修を行うことになっている。
- ・ 自治医科大学学生は、マッチングには参加しない。

(3) 定員

- ・ 受け入れる各年の研修医の定員は15名であり、自治医科大学卒業生もこの15名の中に含まれている。

(4) 協力型臨床研修病院として

- ・ 協力型臨床研修病院として、香川大学附属病院及び岡山大学病院より短期間の研修医を受けている。
- ・ 短期研修を行う研修医数の上限は定めないが、同時期の総研修医数を配慮する。
[→「17章 協力型研修病院としての研修体制」を参照]

2. 公募研修医の選考方法

(1) 提出書類：応募申込書、小論文

(2) 面接試験：臨床研修医採用面接委員により面接試験を行い、マッチングシステムにより採用予定者が決定される。

3. 募集・採用の計画と見直し

実務部会は、研修医の募集人員、募集方法、選考方法などの募集・採用の計画について自己評価を行い、研修修了者や研修管理委員会外部委員の意見を参考にしながら、見直しと調整を行う。その調整案を卒後臨床研修センター運営委員会に諮り、研修管理委員会で審議し、決定する。

4. 臨床研修の中断と再開

- #### (1) プログラム責任者は、必要に応じて各研修医の研修進捗状況を研修管理委員会に報告する。研修管理委員会は、研修医の研修継続が困難（医師としての適性を欠く場合、重大な傷病、妊娠・育児・出産等の理由により長期の休止又は中止が必要な場合など）と認めた場合、当該研修医がそれまでに受けた臨床研修の評価を行い、当院院長（基幹型臨床研修病院の管理者に相当）に報告する。

- (2) 当院院長は、(1) の勧告あるいは研修医自身の申し出を受けて、臨床研修の中断をすることができる。
- (3) 当院院長は、研修医の臨床研修を中断した場合、速やかに、当該研修医に「臨床研修中断証」(「医師法第 16 条の 2 第 1 項に規定する臨床研修に関する省令の施行について」の様式 11) を交付する。
- (4) 臨床研修を中断した者は、自己の希望する臨床研修病院(当院を含む)に、臨床研修中断証を添えて臨床研修の再開を申し込むことができる。
- (5) 中断した研修医の臨床研修を当院で受け入れる場合には、当該臨床研修中断証の内容を考慮した研修を行う。

5. 研修修了手続き

- (1) 研修管理委員会は、研修医の研修修了に際し、次項に掲げた当該研修医の評価を管理者(当院院長)に報告する。
- (2) 管理者(当院院長)は、その報告に基づき、次項に掲げた修了基準により研修修了が認められるときは、臨床研修修了証(様式 14)を交付する。
- (3) 管理者(当院院長)は、下記 6.(3) の評価に基づいた研修を修了していない(未修了)と認めるときは、速やかにその旨を当該研修医に対し理由を付して文書(様式 16)で通知する。

6. 臨床研修期間修了時の評価法と修了基準

- (1) プログラム責任者は、研修管理委員会に対して研修医ごとの臨床研修目標の達成状況を報告する。
- (2) 研修管理委員会は、研修修了の可否について評価を行う。
- (3) 以下の修了基準(①②③の 3 つ)が満たされたときに、臨床研修の修了と認める。

① 研修実施期間の評価

- ・ 研修期間(2年間)を通じた研修休止の上限は 90 日とする。
- ・ 研修休止の理由は、傷病、妊娠、出産、育児その他の正当な理由とする。
- ・ 研修期間修了時に研修休止期間が 90 日を超える場合には未修了として取り扱う。基本研修科目、必修科目での必要履修期間を満たしていない場合も未修了となる。
- ・ 休止期間の上限を超える場合は、休日・夜間当直や選択科目期間の利用などにより履修期間を満たすように努める。
- ・ プログラム責任者は、研修医が修了基準に達しなくなる恐れがある場合には、事前に研修管理委員会などへ報告・相談し対策を講じ記録に残す。
- ・ 未修了の場合は、原則として当院の研修プログラムを引き続き継続して、不足する期間分以上の研修を行う。

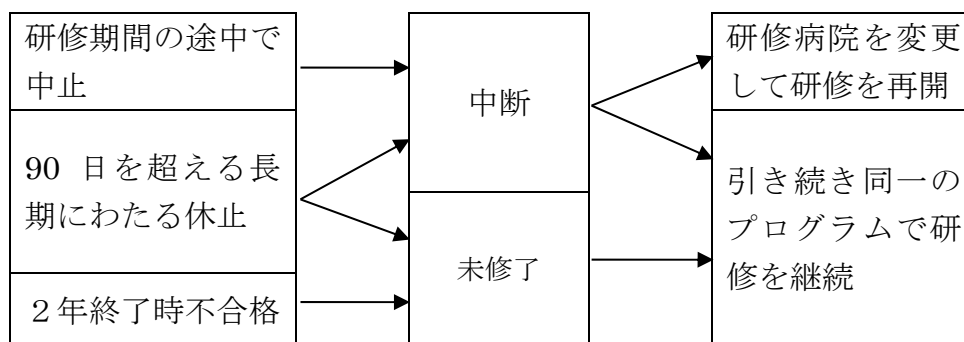
② 「臨床研修の到達目標」達成度の評価

- ・ 厚生労働省が示す「臨床研修の到達目標」のうち、全ての必須項目を達成すること。
- ・ 32 編の全てのレポートを完成させること。

③臨床医としての適性の評価

- ・ 安心・安全な医療の提供ができない者は研修を修了できない。
- ・ 法令・規則が遵守できない者は研修を修了できない。
- ・ なお、臨床医としての適性に問題がある場合には、未修了・中断と判断する前に地方厚生局に相談する。

【まとめ表】



※上記「4. 臨床研修の中断と再開」、「5. 研修修了手続き」及び「6. 臨床研修期間修了時の評価法と修了基準」については、厚生労働省が定める新医師臨床研修制度（医師法第16条の2、医師法第16条の2第1項に規定する臨床研修に関する省令、医師法第16条の2第1項に規定する臨床研修に関する省令の施行について等）に準拠する。

8章：研修医の研修規程

1. 基本事項

- (1) 本院において臨床医学の实地研修を受けるためには、医師国家試験に合格して医師免許を持つものでなければならない。
- (2) 当プログラムは厚生労働省が定める新医師臨床研修制度（医師法第16条の2）に則ってこれを実施する。
- (3) 当プログラムの研修期間は2年間とする。なお研修途中の休止・中断は厚生労働省が定める新医師臨床研修制度に則って実施される。
- (4) 研修期間中は、当院及び臨床研修協力病院・施設の職務規定を遵守しなければならない。
- (5) 臨床研修医は臨床研修に専念するものとし、臨床研修病院及び臨床研修協力施設以外の医療機関における診療（いわゆる「アルバイト診療」）を禁止する。

2. 研修医の診療における役割、指導医との連携、診療上の責任

(1) 研修医の役割

指導医、上級医と共に入院、外来患者を受け持つ。

※研修医は、担当研修医の立場であり単独で患者を担当しない。

(2) 指導医・上級医との連携

指示を出す場合は指導医・上級医に相談する。特に以下の事項に関する業務を行う場合には、原則として事前に指導医と協議し、指導を受けなければならない。

- ①治療方針の決定及び変更
- ②検査方針の決定及び変更
- ③患者・家族に対する検査方針、治療方針や予後の説明
- ④診断書の記載
- ⑤手術及び特殊な検査
- ⑥入退院の決定
- ⑦一般外来、救急外来における帰宅及び入院の決定

(3) 診療上の責任

研修医が患者を担当する場合の診療上の責任者は、指導医・上級医にある（入院患者及び一般外来は各診療科、救急外来は日当直）。

(4) 指導医・上級医の承認

研修医は、指示や実施した診療行為について指導医・上級医に提示する。各指導医・上級医は、それを確認し、診療録に記録を残す。

3. 研修医の指示出し基準

指導医・上級医の指導のもとに行うが、その際には「研修医が単独で行ってよい処置、処方の基準」を参考にする。

[→附属資料参照 研修医が単独で行ってよい処置、処方の基準]

4. 研修医の実務規程

(1) 病棟

- ・ 研修医は、プログラムの一環として、担当研修医の立場で病棟での入院診療を行う。
- ・ 研修医は、指導医・上級医より指定された患者を診療対象とし、指導医・上級医の指導のもとに診療を行う。
- ・ 研修医は、指導医・上級医と随時コミュニケーション（報告・相談・連絡）を行う。また、他職種とのコミュニケーションも図りながら、自ら担当した症例について、診療計画を立て、症例のプレゼンテーションを行う。診断治療の方向性や成果、問題点などについて、指導医・上級医と議論し診療計画を修正していく。
- ・ 研修医は、指導医・上級医と共に、あるいは医療チームに加わった上で、ベッドサイドカンファレンス、病棟カンファレンス、症例検討会などに参加し、患者に関する情報を共有する。カンファレンス等の内容を診療録に記載する。

(2) 一般外来及び救急外来

【一般外来、救急外来 共通】

- ・ 研修医は、研修カリキュラムの一環として担当研修医の立場で外来診療を行う。
- ・ 研修医は、指導医・上級医により指定された患者を診療対象とし、指導医・上級医の指導のもとに診療を行う。
- ・ 診察症例について、外来担当医師とディスカッションを行う

【救急外来】

- ・ 研修医は、一般的な疾患を中心に一次から三次までの救急患者の診療を行う。
- ・ 平日の日勤帯の患者は、救急担当医と共に救急部所属研修医が対応する。
- ・ 夜間・土日祝祭日は、指導医・上級医の日当直医と共に研修当直医が対応する。
- ・ 指導医・上級医の許可、監視の下に研修規定を遵守しながら研修医が診察を行う。診察の最後に指導医・上級医のチェックを受ける。救急外来患者の帰宅の決定は指導医・上級医が必ず行う。研修医だけで行ってはならない。
- ・ 日当直中は、必ず PHS で連絡が取れるようにしておく。
- ・ 夜間当直の翌日は、帰宅して休養をとる。

(3) 手術室

- ・ 初めて入室する前には、下記の事項についてオリエンテーションを受けておく。
 - ①更衣室、ロッカー、履物、術衣について
 - ②手洗い、ガウンテクニックの実習
 - ③清潔・不潔の概念と行動
- ・ 帽子、マスク、ゴーグル（希望者）を着用する
- ・ 手術室スタッフ不在時の入室は禁止する。（薬物濫用の予防目的がある）
- ・ 不明な点があれば、手術室師長、看護師、指導医・上級医に尋ねる。

9章：研修医の処遇

1. 研修医の処遇規程

- (1) 身分：嘱託職員（非常勤）
- (2) 報酬月額：1年次：330,000円、2年次：350,000円
- (3) 手当：宿日直手当 1年次：勤務1回につき10,500円
2年次：勤務1回につき21,000円
時間外勤務手当 診療業務に必要な勤務について支給
- (4) 勤務時間：8:30～17:00（週5日）
※月4回程度の宿日直勤務あり。
- (5) 有給休暇：年次休暇（1年次10日・2年次11日）、夏季休暇（5日、毎年必ず確保している）、年末年始、病気休暇等
- (6) 宿舎：研修医公舎
・自己負担14,000円（駐車場代3,900円別途）
・研修医公舎に空きがない場合は借上公舎（一定額を助成）
- (7) 社会保険等：健康保険、厚生年金保険、労働者災害補償保険、雇用保険
- (8) 医師賠償責任保険：病院において加入。個人加入は任意。
- (9) 研修医室：あり（机、ロッカー、書庫、仮眠室あり）
- (10) インターネット環境：インターネット接続が可能な共用のコンピューターを研修医室に設置
- (11) 外部研修：学会、研究会等への参加：可
学会、研究会等への旅費支給：有
このほか、2年次に限りスキルアップのための専門コース参加費用を助成
- (12) アルバイト：研修期間中のアルバイトは禁止する。

2. 組織上の位置づけと労働性・研修の整合性

- (1) 組織上の位置づけ
 - ①研修医は、卒後臨床研修センターに配置する。
 - ②研修医の身分は、非常勤職員とする。
 - ③職務、任用、服務については、「8章 研修医の研修規程」を参照。

3. 健康管理

- (1) 定期健康診断：労働安全衛生法に基づき年1回実施（必須）
- (2) 特殊業務従事者健康診断：安全労働衛生法に基づき年2回実施（必須）
 - ①電離放射線取扱業務、②深夜業務
- (3) 予防接種：常勤職員に準じて実施
- (4) コンディションの把握
 - ①チェック項目：勤務時間、睡眠時間、受持ち患者数、対人関係等
 - ②把握方法：アンケート調査、メンター・指導医・指導者からの報告

プログラム責任者による定期的な面談
ストレスチェックの実施

③支援体制

- ア. 指導医・上級医、メンター、プログラム責任者による支援
- イ. 県職員課の職員相談窓口による支援
- ウ. 総務企画課職員による支援

④ストレス反応を起こした研修医への対応

ア. サポート体制

- ・指導医・上級医、メンター、プログラム責任者からなるサポートチームを編成し対応する。必要に応じ、協力型病院である丸亀病院医師（精神科）がサポートを行う。
- ・プログラム責任者と管理者は、研修の休止、再開、プログラムの調整を行う。

イ. 研修の休止と復帰

- ・研修の休止に当たっては、精神科医師のアドバイスを得るなど、プログラム責任者が研修休止の理由の正当性を判定し、履修期間の把握を行う。
- ・復帰に当たっては、精神科医師のアドバイスを得るなど、研修医のメンタル的な支援を行い、段階的に復帰させる。
- ・指導医・上級医、指導者等への周知徹底を図る。
- ・プログラム責任者は、当該研修医があらかじめ定められた研修期間内に研修を修了できるように努める。

4. 研修医の宿日直、当直室、仮眠室

(1) 宿日直

- ・*「5章－2 救急医療」の項目を参照

(2) 当直室、仮眠室

- ・当直中の仮眠は、1階の研修医当直室を使用する。
- ・当直室のシーツ等は、清掃業者により取替えを行う。

5. レクリエーションほか

- ・毎年秋に研修医と指導医による1泊2日親睦旅行を実務部会主催で行っている。
- ・4月、3月には医局会主催で歓迎会、送別会を行っている。
- ・毎年春に「研修修了記念文集」を作成して、研修医、指導医、上級医、病院職員の親睦を深めるとともに、お互いの記念としている。

10 章：研修記録の保管・閲覧基準

1. 研修記録の保管

- (1) 研修医に関する次の事項を記載した記録を 10 年間は紙及び電子媒体で保存する。
 - ・ 氏名、医籍登録番号、生年月日
 - ・ 研修プログラム名
 - ・ 研修開始・修了・中断年月日
 - ・ 臨床研修病院、協力型臨床研修病院、臨床研修協力施設の名称
 - ・ 臨床研修内容と研修医の評価
 - ・ 研修レポート
 - ・ 2 年間の学術的研修記録シート、学会発表・論文別刷りを添付
 - ・ 中断した場合は中断理由
- (2) 研修記録は、年度・氏名ごとに総務企画課で保管する。
- (3) EPOC による評価記録は、EPOC サーバーに保管される。①各研修医に対する評価、②各指導科・各指導施設・プログラム全体に対する評価 は印刷して、紙ファイル形式でも保存しておく。

2. 記録の閲覧方法

- (1) 個人情報保護の観点から、原則として部外者による閲覧はできない。
- (2) 管理者、指導医、指導者及び研修医は、必要に応じて記録を閲覧できる。
- (3) 紙記録の閲覧は、閲覧者名、閲覧目的、閲覧項目等を記し、総務企画課担当者に依頼する。
〔→附属資料参照 閲覧の申込用紙〕
- (4) EPOC の記録閲覧は紙記録と同様に総務企画課担当者にプリントアウトを依頼する。
- (5) 閲覧記録は、総務企画課において 5 年間保存する。

11 章：研修プログラム等

1. 研修カリキュラム内容

A. オリエンテーション

医師にとって必要な基本事項について、臨床研修の開始前に 1 週間程度のオリエンテーションを行っている。内容は以下のとおりである。

〔オリエンテーション項目〕

- 1) 院内各部門への巡回と挨拶
- 2) 事務的な説明（手続き/総務企画課）
- 3) 院長挨拶と教育（守秘義務、診療義務等医師の基本的義務と職命、医の倫理、生命倫理、プロフェッショナリズム、リスボン宣言、ヘルシンキ宣言）
- 4) 院長講話（病院概要、組織、機能、病院理念、基本方針、職員倫理・職務、医療安全対策、院内感染対策、個人情報保護）
- 5) プログラム責任者講話（医療倫理ほか）
- 6) 地域連携室（他医療機関との連携（病診連携）の重要性につき説明を受ける）
- 7) 診療情報管理（診療録マニュアルの概説および法律上の診療記載に関する教育を受ける）
- 8) リハビリテーション（治療の一環としてのリハビリテーションの重要性に関する説明を受ける）
- 9) 中央検査部（各種血液検査・生理検査・病理検査の概要、説明を受ける）
- 10) 採血（放射線業務従事者健康診断）（採血を行う）
- 11) 眼・皮膚の検査（放射線業務従事者健康診断）（眼の検査、皮膚の検査を行う）
- 12) 放射線部の概要（放射線部の概要と留意事項の説明を受ける）
- 13) 感染症対策（院内における感染症対策の現況に関して説明を受ける）
- 14) 救急部（蘇生術 ABC の復習を行う（ACLS 実習））
- 15) 褥瘡対策（褥瘡対策に関する院内の取り組みに関する説明を受ける）
- 16) NST（NST の意義、院内における取り組みに関する説明を受ける）
- 17) クリニカルパス（クリニカルパスの意義、院内におけるパスの実例、パス大会に関する説明を受ける）
- 18) 保険診療（保険診療についての説明を受ける）
- 19) 臨床倫理（臨床倫理についての説明を受ける）
- 20) 電子カルテ（医療情報管理室）（電子カルテの入力操作に関する講義と実習を行う）
- 21) 外科実習（外科の縫合実習を行う）
- 22) EPOC・管理システム（研修プログラム概要（EPOC と管理システム）に関する説明を受ける）
- 23) 輸血部（輸血製剤の取り扱い方法および適応疾患に関する説明を受ける）
- 24) 緩和ケア（緩和ケアに関する院内の取り組みについての説明を受ける）
- 25) 看護部（看護業務に関する説明を受け、実習を行う）
- 26) 医療安全管理室（医療安全に関する概要、重要性と院内の取り組みに関する説明を

受ける)

27)薬剤部 (薬剤の一般知識及び麻薬処方、処方箋に対する法的義務の説明を受ける)

28)救命救急センター (ICLS 研修を行う)

B. 研修医別 年間カリキュラム

年間の研修カリキュラムは、研修管理委員会により研修医ごとに決められている。診療科ごとの研修内容は、各研修科が作成する。選択研修は、初年度の1月末に各研修医の希望を聞き日程調整をして決定するが、その後もいくらかの変更を認めている。

[必修科目と研修期間]

①基本研修科目

i) 内科	2 6 週間
総合診療科、循環器、消化器 (消化管・肝胆膵)、呼吸器、 腎臓・膠原病、血液、腫瘍、緩和ケア、糖尿病、神経	
ii) 外科	1 6 週間
・ 一般外科	8 週間
消化器、呼吸器、乳腺・内分泌、(心・血管(希望者) ¹⁾)	
・ 脳神経外科 ²⁾	4 週間
・ 整形外科 ²⁾	4 週間
iii) 救急・麻酔科	1 6 週間
・ 救急部 ³⁾	8 週間
・ 麻酔科	8 週間

②必修研修科目

i) 小児科	4 週間
ii) 産婦人科	4 週間
iii) 精神科	1 週間
iv) 地域医療	4 週間

③選択研修⁴⁾

約 2 8 週間

注 1) 希望者は外科研修中に研修の一部 (2 週間以内の期間) として、心臓血管外科の研修も可能である。

注 2) 外科研修の一部として、脳神経外科及び整形外科の研修を必修科目とする。

注 3) 厚労省で定められた救急研修は 3 ヶ月である。夜間休日の日当直期間を救急研修期間 1 ヶ月分として加えて合計 3 ヶ月とする。

注 4) 選択研修期間中の研修部署は、研修医の希望、受け入れ部署の受け入れ人数、受け入れ可能期間を考慮し、別途協議する。

注 5) 基本研修、必修研修に含まれていない部署の研修は、イブニングセミナー、救急部や関連する部署での研修、選択研修で到達目標を達成することが望ましい。

注 6) ゴールデンウィーク、年末・年始の連続休日を含む期間の研修は、所定の研修期間に 1 週間を加えることを考慮するが、研修医によってはいくらかの長短が発生する可能性がある。

注 7) 基本研修科目において、脳神経外科、整形外科、小児科、産婦人科の 4 科目中 2 科目は、強い希望があれば履修を免除可能である。

C. 研修カリキュラムの変更等

基本研修科の変更および選択研修科の決定について、以下のとおり、運用方法を定める。

1. 基本研修科の変更について

- ・基本研修科目のうち、脳神経外科、整形外科、小児科、産婦人科の4科目中2科目までは、選択研修科に変更できる。しかし、併せてその日程までを移動変更することはできない。(ただし、3年目以降の専門研修診療科を決めるための日程の移動変更は可能。)
- ・変更之际は、実務部会長（大橋）に相談して許可を得ることが必要。
- ・実務部会長が基本研修科の診療科長に変更の連絡を行った後に、研修医は自ら変更後に選択を予定している研修科の診療科長に許可を得る。
- ・変更手続きは当該科研修開始より2ヶ月前までに終了していなければならないので、十分な余裕を持って実務部会長に相談すること。なお、1年目の4-6月に基本研修科を含むカリキュラムがあるが、これらの研修科を希望しない者が4-6月に当該科を含まないカリキュラムを選択できるよう考慮する。
- ・変更は実務部会で検討後、センター運営委員会、研修管理委員会に報告される。

2. 選択科の選択・変更について

(a) 1年目研修医が2年目の選択科を決める場合

- ・1年目の1月末までに（2月の実務部会で検討できるように）、リーダーが全員分の選択希望科（2年目の全期間分が望ましいが、最低でも9月までの期間分）を取りまとめ、9月までの期間につき研修医間の同時期の重複等を調整した上で、総務企画課に一覧表を提出する。
- ・2月の実務部会后、総務企画課がその検討結果に基づき、各科の診療科長に許可を得る。
- ・3月の実務部会で承認し、その前後の研修管理委員会に諮り、事後になるが3月のセンター運営委員会で報告。

(b) 2年目研修医が未決定の選択科を決める場合

- ・未決定の選択科については、7月末までにリーダーが選択希望科を取りまとめ、研修医間の同時期の重複等を調整した上で、総務企画課に一覧表を提出する。
- ・研修医は選択予定の研修科の診療科長に許可を得る。
- ・9月の実務部会で承認、9月のセンター運営委員会で報告、研修管理委員会委員へ報告。

(c) 決定済みの選択科の変更を希望する場合

- ・変更希望がある場合は、当該研修科での研修開始の2ヶ月前までに総務企画課に申し出ること。
- ・研修医は変更前後の研修科の診療科長に事前に話をして許可を得ておくこと。
- ・実務部会で承認、センター運営委員会で報告、研修管理委員会委員へ報告。

D. 研修医用 レクチャー・カンファレンス

〔レクチャー・カンファレンス内容〕

1) 臨床病理症例検討会〔CPC〕(必修)

- ・毎月第4金曜日 18:00～19:00 1階講堂（中会議室）

2) イブニングセミナー（必修）：1時間程度（日時は未定）

①C Vカテーテル挿入 ②眼科実習講義 ③耳鼻咽喉科実習講義 ④その他

3) モーニングレクチャー

- ・毎月第2、4、(5)木曜日 7:30～8:00 医局カンファルーム
- ・院内常勤医によるレクチャー 希望の講義があれば実務部会まで連絡する。

4) モーニング画像レクチャー

- ・毎月第1、3木曜日 7:30～8:00 医局カンファルーム
- ・放射線診断医によるレクチャー

5) 救急カンファレンス

- ・毎月第4水曜日（変更のことあり） 1階講堂（中会議室）
- ・救急症例の検討会
- ・研修医、指導医、救急部コメディカルスタッフ、救急隊員 など参加
- ・コメンテーターとして長野修（高知大学救急部教授）先生の指導

6) 薬の勉強会

- ・毎月第1、3月曜日 19:00～1時間弱 3階35会議室
- ・市販薬物の説明と周辺薬剤の薬理的説明など

7) 院内各科カンファレンス、各臓器別カンファレンス

- ・積極的に参加する。

8) 院外の研究会、学会

- ・積極的に参加する。
- ・遠方の学会に参加希望の場合は当該診療科に相談する。

2. 基本分野への対応状況

A.医療人として必要な基本姿勢・態度

- 1) 基本的姿勢・態度：オリエンテーション、各科研修中の形成的評価とフィードバック
- 2) インフォームドコンセント：オリエンテーション、各科研修中の形成的評価とフィードバック
- 3) 問題対応能力：オリエンテーション、各科研修中の形成的評価とフィードバック、モーニングレクチャー
- 4) 安全管理：オリエンテーション、院内講習会への参加、随時の安全情報提供
- 5) 症例提示・意見交換：各科研修中、院内カンファレンス、院外学会発表、論文作成
- 6) 地域医療：地域研修
- 7) 社会性：オリエンテーション、各科研修中の形成的評価とフィードバック、モーニングレクチャー

B.経験すべき診察法・検査・手技

- 1) 医療面接：総合内科外来、救急外来、各科の診療にて研修
- 2) 基本的診察能力：*附属資料 「経験目標の各科分担表」を参照
- 3) 基本的臨床検査：*附属資料 「経験目標の各科分担表」を参照
- 4) 基本的手技：*附属資料 「経験目標の各科分担表」を参照

- 5) 基本的治療法：*附属資料 「経験目標の各科分担表」を参照
- 6) 医療記録：*附属資料 「経験目標の各科分担表」を参照、オリエンテーション、各科診療にて研修
- 7) 診療計画：各科の診療にて研修

C.経験すべき症状・病態・疾患

- 1) 頻度の高い症状：*附属資料 「経験目標の各科分担表」を参照
- 2) 緊急を要する症状・病態：*附属資料 「経験目標の各科分担表」を参照、救急外来、各科診療にて研修
- 3) 経験疾患：*附属資料 「経験目標の各科分担表」を参照
- 4) 特定医療現場の経験：*附属資料 「経験目標の各科分担表」を参照

3. 経験目標の各科分担表（「附属資料」に通常サイズ文書を掲載）

	経験すべき診察法・検査・手技(厚労省)		経験すべき疾患・病態・疾患(厚労省)		左記項目以外(十当院追加事項)
	検査	手技	症状・病態	疾患・病態	
	◎自ら実施し、結果を解釈できる。 ◎自ら行った経験がある。 △検査の適応が判断でき、結果の解釈ができる。		R 自ら診察して鑑別診断を行い、レポート提出。◎自ら初期治療に参加し症状を経験。△可能な限り経験すべき症状。		(*) 以下は当院独自の追加項目
総合診療部	◎尿検査、◎便検査、◎血算、◎生化学検査、◎免疫血清検査、◎単純XP、◎CT、△造影XP、△MRI、△核医学		(*) 頻度の高い全35症状(他部門と重複)	◎ウイルス感染症、◎細菌感染症、◎結核、◎老年期症候群、△真菌感染症、△寄生虫疾患	◎医療面接、◎基本的診察法、◎基本的治療法、◎処方箋・指示箋、◎紹介状・返信、◎予防医療の経験、◎症例提示
循環器内科	◎心電図/負荷心電図、◎心臓超音波		R 胸痛、R 動悸、◎急性心不全、◎急性冠症候群、	R 心不全、R 高血圧症、◎狭心症・心筋梗塞、◎不整脈、◎動脈疾患、△心筋症、△弁膜症、△静脈・リンパ管疾患	(*) △心血管造影
呼吸器内科	◎動脈血ガス分析、◎細菌検査、薬剤感受性、◎呼吸機能、◎気管支鏡、		R 呼吸困難、R 咳・痰、△喘声、△急性呼吸不全	R 呼吸器感染症、◎呼吸不全、◎閉塞性・拘束性肺疾患、△肺循環障害、△異常呼吸、△肺腫	
消化器内科	◎腹部超音波、◎消化器内視鏡		R 嘔気・嘔吐、R 腹痛、R 便秘異常、◎急性消化管出血、△食欲不振、△黄疸、△胸やけ、△嘔下困難	R 食道・胃・十二指腸疾患、◎小腸・大腸疾患、◎肝疾患、◎高齢者の栄養摂取障害、△胆嚢・胆管疾患、△膵臓疾患	(*) △腹部血管造影
腎臓・泌尿器内科			R 浮腫、R 発疹、R 結膜充血、R 血尿、R 排尿障害、△尿量異常、△急性腎不全	R 腎不全、◎泌尿器疾患、ORA(関節リウマチ)、◎アレルギー疾患、△糸球体腎炎、△全身疾患の腎症、△SLE(全身性リウマチ)	△透析
血液腫瘍内科	◎血液型、交叉試験、△病理・細胞診(血液疾患)	◎輸血	R リンパ節腫脹、R 発熱、△全身倦怠感、△鼻出血	◎貧血、△白血病、△悪性リンパ腫、△出血傾向・紫斑病	◎緩和ケア、終末期医療の経験
内分泌・代謝内科			R 不眠、△体重減少・増加、△聴覚障害、△不安・抑鬱	R 糖代謝異常、◎高脂血症、△視床下部・下垂体疾患、△甲状腺疾患、△副腎不全、△蛋白・核酸代謝異常	
救急部	◎胸骨圧迫、◎採血法、◎導尿、◎簡単な切開排膿、◎軽度の外傷・熱傷、◎除細動		◎心拍停止、◎ショック、◎意識障害、◎急性感染症、◎外傷、◎急性中毒、◎誤飲・誤嚥、◎熱傷、◎精神科急患	◎湿疹・皮膚炎、◎じんましん、◎皮膚感染症、◎男性生殖器疾患、◎熱傷、△薬疹、△中毒、△アレルギー、△環境要因疾患	◎診断書・死亡診断書、◎救急医療の経験
麻酔科		◎気道確保、◎人工呼吸、◎注射法、◎腰椎穿刺、◎局所麻酔、◎気管挿管			(*) ◎気道確保、◎気管内挿管(80%成功)、◎静脈ライン、◎動脈ライン、△全身管理(補液、人工呼吸器含む)
外科	△病理・細胞診	◎圧迫止血法、◎包帯法、△ドレーンチューブ、◎胃管挿入、◎創部消毒、◎皮膚縫合、△体腔穿刺	◎急性腹症	◎横隔膜・腹壁・腹膜(腹膜炎・ヘルニア)、△胸膜・縦隔、横隔膜疾患	R 外科症例レポート (*) ◎中心静脈確保(50%成功)、◎体腔穿刺、◎周術期管理
小児科	◎小児の診察	◎小児注射法、◎小児採血法		◎小児けいれん疾患、◎小児ウイルス疾患、◎小児喘息、△小児細菌感染症、△小児先天性心疾患	◎周産・小児・成育医療の経験
産婦人科			◎妊娠・分娩、△流・早産・満期産、△女性生殖器・性感染症		◎周産・小児・成育医療の経験
脳神経外科		◎髄液検査、△神経生理学検査	R 視力障害、視野狭窄、◎脳血管障害、△失神、△痙攣発作、	R 脳脊髄血管障害、△脳・脊髄外傷、△神経変性疾患、△脳炎(髄膜炎)	
整形外科			R 腰痛、R 四肢のしびれ、△関節痛、△歩行障害	◎骨折・関節・靭帯損傷、◎骨粗鬆症、◎脊髄障害、△(脳)・脊髄外傷、△(脳炎)・髄膜炎	
レクチャーその他			[神経内科] R 頭痛、R めまい	[眼科]◎屈折異常、◎白内障、△角膜炎、△眼圧変化、◎緑内障、[耳鼻]◎中耳炎、◎アレルギー性鼻炎、△副鼻腔炎、△扁桃炎、△外耳・咽頭・喉頭・食道、[神経内科] R 認知症、	(*) ◎眼底検査、◎耳鏡・鼻鏡
精神科(丸亀)	◎精神面の診察		R 気分障害・うつ病、R 統合失調症、◎身体表現障害・ストレス障害、△症状精神病、△アルコール依存症、△不安障害(パニック障害)		◎精神保健・医療の経験
地域(小豆島・陶・さぬき)					◎地域医療の経験 地域保健の経験

12章：研修医の評価

1. 評価1. 評価者と評価方法

(1) ローテートする診療科の各科指導責任者

EPOC を用いて「臨床研修の到達目標」の達成度を評価する。また、定められたレポートの評価を行う（レポートの指導は上級医。責任者以外の指導医が行えばよいが、最終的な評価は各診療科指導責任者が行い、結果を EPOC に入力する）。選択科によっては指導医の条件を満たす医師が不在の場合があるが、その場合には各診療科上級医より評価の報告を受けたプログラム責任者又は副プログラム責任者が最終的な評価を行って「EPOC」に入力する。

→各診療科修了時

(2) 研修指導体制の項で定められた指導者

- ・ 「医療指導者による研修医評価票（項目毎、スケール形式）」等によりコミュニケーション能力、チーム医療への貢献などの評価を行う。→年1回（12月頃）

〔→附属資料 **指導者による研修医評価票**等を参照〕

(3) 同期研修医

- ・ 「「この研修医のココが素晴らしい！」シート（各個人に対して自由記載）」により、positive な内容の情報のみを集め評価に役立てる。negative な内容の情報は研修医同士の人間関係を乱すため収集しない。→年1回（12月頃）

〔→附属資料 **「この研修医のココが素晴らしい！」シート**を参照〕

(4) 研修医自身の自己評価

- ・ EPOC による自己評価を入力。→各診療科修了時
- ・ 医療指導者による研修医評価表と同じ評価項目を用いた「研修医 自己評価票」。→年1回（12月頃）

〔→附属資料 **研修医 自己評価票**を参照〕

(5) 臨床研修の記録（別冊）

- ・ 毎月、経験目標の経験数を記入する
- ・ 巻末には学術的研修の記録があるので随時記入する。

2. 評価の仕組み

- * プログラム責任者及び実務部会は、各種書類・資料、評価結果を回収、整理する。形成的評価は、プログラム責任者と実務部会により、研修医本人へフィードバックされる。
- * 研修修了時における2年間の総括的評価は、資料よりプログラム責任者と実務部会で評価原案を作成する。評価原案は、卒後臨床研修センター運営委員会、研修管理委員会で順次検討され、最終的な評価が決定される。

〔保管する研修医評価書類〕

- ・ EPOC による評価
- ・ 症例レポート、病態診断レポート、CPC レポート、外科レポート
- ・ 臨床研修の記録及び2年間の学術的研修記録シート：CPC 出席、講演会・レクチャーへ

の参加、口演・論文発表などの記録がまとめられている。発表の記録は、プログラム・抄録のコピー、論文は別刷りを添付する。

- ・医療指導者による研修医評価表、「この研修医のココがすばらしい！」シート、研修医自己評価票

3. 研修修了時に不十分なときの対応 [→「7章—6 研修修了の手続き」参照]

- ・到達度評価は、結果が未到達の場合、研修期間中に到達できるようプログラム責任者と実務部会が中心となって、本人と共に対策をたてる。
- ・プログラム責任者は、研修医が修了基準に達しなくなる恐れがある場合には、事前に研修管理委員会などへ報告・相談し、対策を講じ記録に残す。休止期間の上限を超える場合は、休日・夜間当直や選択科目期間の利用などにより、履修期間を満たすように努める。達成項目、レポート作成で不足する場合には、選択研修期間内に達成できるよう調整する。
- ・それでも研修管理委員会による評価の結果、研修医が臨床研修を修了していると認められなかったとき（未修了）は、当院院長は当該研修医に対してその理由を付して、その旨を文書で通知する。未修了の場合には原則として当院の研修プログラムを引き続き継続して、修了基準に達するよう、不足する期間、到達項目等の研修を行う。

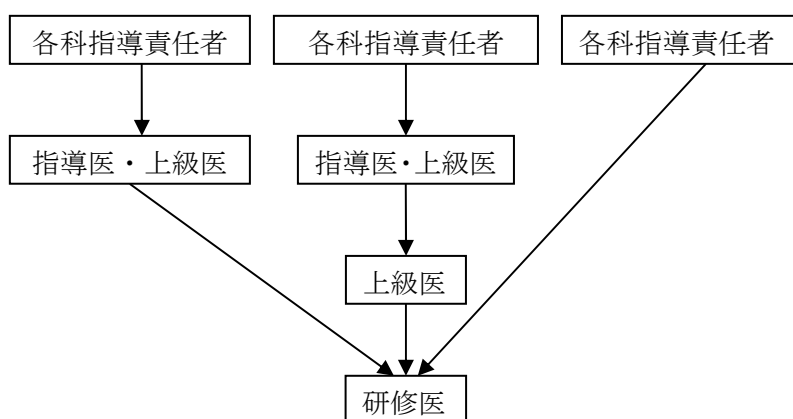
13 章：臨床研修における指導体制

「3 章 当院の研修システム」において、病院全体の管理体制と指導体制の関係を説明している。本章では各科研修における指導体制について説明する。

1. 診療業務における屋根瓦方式の指導体制

研修医は、入院患者の副主治医となり、主治医である上級の医師（指導医又は上級医）と共同して担当する。主治医の上に更に指導医あるいは各科指導責任者が位置づけられており、いわゆる「屋根瓦方式」の指導体制がとられている。

日当直業務では、1 年次研修医、2 年次研修医、当直医（指導医又は上級医）からなる屋根瓦方式がとられている。



2. 各研修科における指導医・上級医の指導体制

- 指導医・上級医は、各科指導責任者の指示に従って担当分野の指導を行い、評価を各科指導責任者に報告する。各科指導責任者は、最終評価を行い EPOC に入力する。
- 指導医・上級医は、研修医に関する重大な情報（研修医の身体的・精神的変化、安心・安全な医療が提供できない、法令・規則が遵守できないなど）に気付いた場合は、各科指導責任者又はプログラム責任者に報告する。

〔→附属資料 各科指導責任者、指導医、上級医に関する規程を参照〕

3. 指導者による指導体制

- 指導者は、歯科医師、看護師（看護部長、副看護部長、看護師長）、薬剤部長、放射線部技師長、中央検査部技師長、リハビリテーション部スタッフ代表者、栄養科技師長、診療情報管理士の代表者などで構成する。
- 指導者は、医療従事者の先輩として医療現場の実務、チーム医療などについての助言と指導を行うとともに、各部門（例えば病棟看護師）と研修医のチームワークが円滑に行われるよう配慮する。指導者は研修医の評価と指導医の評価を行う。
- 指導者は、研修医に関する重大な情報（研修医の身体的・精神的変化、安心・安全な医療

が提供できない、法令・規則が遵守できないなど)に気付いた場合は、プログラム責任者に報告する。

[→附属資料 [指導者に関する規程](#)を参照]

4. メンター制度によるサポート

- ・ メンター制度の役割は、2年間の研修期間中、研修医が将来の医師像を達成するために研修が有用なものとなるよう支援しながら、その成長を見守ることである。メンターは実務部会で選出された指導医又は上級医のうち、メンター制度の趣旨を理解し、合意が得られた者で構成する。
- ・ メンターを希望する研修医は随時プログラム責任者又は副プログラム責任者又は実務部会副部長に申し出る。
- ・ メンターは、研修医から希望があった際に、プログラム責任者及び実務部会によって選考され依頼される。

[→附属資料 [メンターに関する規程](#)を参照]

5. プログラム責任者、実務部会によるサポート

- ・ プログラム責任者又は実務部会の代表者は、定期的（年2回程度）に研修医と個人面談を行い、研修医の身体的・精神的な健康状態、研修の進捗状況を把握するとともに、研修プログラム・環境・指導体制・処遇などに関する問題点と希望、将来の進路、経済的な問題ほか、あらゆることについて意見を交換する。可能なことは解決し、より良い状態で研修が行えるようにサポートする。
- ・ 研修医は、研修中に困ったこと、相談したいことなどが発生した場合には、いつでもプログラム責任者及び実務部会のメンバーに相談できる。相談を受けた実務部会メンバーは、プログラム責任者や他のメンバーとの連絡をとりながら、研修医をサポートする。
- ・ プログラム責任者と実務部会のメンバーは、日頃から研修医と接する時間をつくり、性格や心配事を把握するよう努める。さらに、困ったこと、相談したいことなどが発生した時にいつでも相談できる雰囲気をつくっておく。

6. 指導医・上級医（各科指導責任者を含む）の研修医診療行為に対するチェック体制

- ・ 指導医・上級医は、研修医の診療行為を観察・監視するとともに、常に研修医からの報告・相談・連絡を受けるよう努める。その上で診断治療の方向性や成果、問題点などについて議論し指導を行う。
- ・ 指導医・上級医は、研修医と共に医療チームに加わり、他職種とのコミュニケーションを図りながら、ベッドサイドカンファレンス、病棟カンファレンス、症例検討会などに参加し、患者情報が共有できるよう努める。
- ・ 指導医・上級医は、観察・監視が必要な診療行為を研修医が行う場合には、チェックと指導を行い、その診療行為に問題がなかった場合に電子カルテ上で承認を行う。
- ・ 指導医・上級医は、研修医の診療録記載内容をチェックし、承認・指導を行う。

7. 病院職員による研修医の診療行為に対するチェック体制

- ・ 看護師は、研修医から「研修医が単独で行ってよい処置、処方基準」以外の指示が出された場合には、指示を出した研修医に指導医・上級医の許可を得ていることを確認する。また、その指示内容に疑問がある場合には、指導医・上級医に報告する。報告を受けた指導医・上級医は、真摯に対応し、結果を研修医にフィードバックする。
- ・ 薬剤師は、研修医から出された処方に疑問がある場合には、指示を出した研修医に誤りがないかを確認する。確認後も、その指示内容に疑問がある場合には、調剤する前に指導医・上級医へ報告する。報告を受けた指導医・上級医は、真摯に対応し、結果を研修医にフィードバックする。なお、1年次は研修医単独で薬剤を処方できないシステムになっている。
- ・ 放射線技師、臨床検査技師などコメディカルスタッフは、研修医から出された指示に疑問がある場合には、指示を出した研修医に誤りがないかを確認する。確認後も、その指示内容に疑問がある場合には、指導医・上級医へ報告する。報告を受けた指導医・上級医は、真摯に対応し、結果を研修医にフィードバックする。

8. 日当直時の指導体制

- ・ 指導医・上級医は、研修医と共に外来患者の診察を行い、診断、治療、問題点などについて議論し、指導を行う。
- ・ 指導医・上級医は、研修医の診療行為を観察・監視しフィードバックを行う。さらに後日判明した診療結果などの情報も可能な限りフィードバックするよう努める。
- ・ 指導医・上級医は、診療行為の最後に必ず全体のチェックを行い、救急患者の入院、帰宅を決定する。
- ・ 指導医・上級医は、研修医が行った観察・監視が必要な診療行為として問題がなければ電子カルテ上で承認を行う。また、研修医の診療録記載内容を確認し、指導を行う。

9. 指導医・上級医不在時の対応

- ・ 指導医・上級医は、不在になる予定がある場合には、その期間とともに、不在中の代理となる指導医、上級医、自分への連絡方法を研修医に知らせておく。
- ・ 指導医・上級医は、上記のことを病棟看護師など関連するコメディカル職員にも知らせておく。

10. 研修レポート、退院サマリーの指導医・上級医による確認

- ・ 研修レポート
「経験目標の科別担当項目リスト」に従って、当該診療科の指導医・上級医による指導を受けて作成し、各科指導責任者の評価を受ける。
- ・ 退院サマリー
研修医により作成された退院サマリーは、診療録等記録マニュアルに従い、指導医又は上級医によるチェックを受け、必要に応じて差し戻し・修正が行われた後に診療情報管理室長又は診療科指導責任者のチェックを受けて承認される。

1 1. 「2年間の学術的研修記録」について

- ・ CPC、院内講演会（医療安全・感染を含む）、研修医用必修レクチャー、院外・院内講習会に出席したときは、その都度、配布された「臨床研修シール」を実績記録として集約する。プログラム責任者及び実務部会メンバーは、記録用紙を随時チェックし、出席が少ない場合は指導を行う。
- ・ 学会及び研究会で発表したときはその資料のコピーを、論文発表は別刷りを記録用紙の添付書類として保管する。プログラム責任者及び実務部会メンバーは、随時チェックして、発表実績が少ない場合は、各科指導責任者に依頼して発表ができるよう調整する。

1 2. 指導体制における各部門の役割

(1) プログラム責任者、副プログラム責任者〔→附属資料参照 **規程**〕

- ① 研修プログラム原案の作成、企画立案及び提出
- ② 上記①を実施するため、研修到達目標とその各科分担を決め、各部署への調整、周知を行う。
- ③ 指導体制の整備、調整、維持
- ④ 管理体制の整備、調整、維持
- ⑤ 研修医評価方法の決定、評価の実施、評価結果の収集、評価判定原案の作成・提出、研修医本人へのフィードバック
- ⑥ 未到達の研修医に対する指導・助言・調整。修了認定原案の作成・提出
- ⑦ 休止、未修了、中断に対する対応
- ⑧ 研修医に対する定期的なメンタリング（身体的、精神的、経済的など）
- ⑨ 研修医の進路についての相談、後期研修への橋渡し
- ⑩ 研修環境の整備・維持（福利厚生、研修室、ラボ、教育器具、学会参加旅費など）
- ⑪ 指導医評価方法の決定、評価の実施、評価結果の収集、フィードバック
- ⑫ 指導医への助言、依頼、教育法の指導、各部所間の調整
- ⑬ 研修プログラムの評価、点検・分析、改善策の作成
- ⑭ 研修プログラムに対する第三者評価（研修病院機能評価）受審の主導
- ⑮ 院内全体へのプログラムの周知、広報、環境づくり
- ⑯ 院外への広報（ホームページによる広報、説明会、リクルート）

(2) 実務部会〔→附属資料参照 **名簿**、**規程**〕

- ① 上記プログラム責任者の支援（協力、助言、実施など）
- ② 研修プログラムの実質的な管理

(3) 管理者（当院院長）

- ① 研修修了証の発行
- ② 研修中断が発生した場合の臨床研修中断証の発行
- ③ プログラム責任者、副プログラム責任者、各科指導責任者の任命
- ④ プログラム管理委員会決定事項の院内への周知・実施への協力依頼
- ⑤ プログラム運営における経済的、社会的、人材的、精神的な支援

(4) 各科指導責任者〔→附属資料参照 **名簿**、**規程**〕

- ① 各診療科における研修指導の要であり責任者である。
- ② 各科における研修目標、研修プログラムを作成する。
- ③ メンター、研修医の意見を参考にしながら、各個人の具体的な研修内容を決め実施できるように手配する。
- ④ 研修中の指導の責任を持つ（実質的な現場での指導は指導医・上級医でよい）。研修目標の達成状況を把握し、達成できるように調整する。メンタリングを行う。
- ⑤ 評価を行い、EPOC 入力、レポートチェック等を行う。研修医にフィードバックする。
- ⑥ 必要に応じてメンターやプログラム責任者へ報告・連絡・相談を行う。

(5) メンター（希望する研修医が対象）〔→附属資料参照 **規程**〕

- ① 定期的に面談して、以下のことを行う。
 - ・ メンタリング（身体的、精神的、経済的ストレスなど）。
 - ・ 具体的な将来像を考えながら、その目標に適した研修内容ができるよう導く。
 - ・ 各診療科研修修了時には、適宜振り返りの話し相手となる。大きく不足が発生していた項目は代用できる診療科、選択研修などを利用するよう調整する。
 - ・ 医師の職業倫理、Professionalism などについて、さりげなく指導する。
 - ・ 必要に応じてメンターやプログラム責任者へ報告・連絡・相談を行う

(6) 指導者（歯科医師、看護師、コメディカル）〔→附属資料参照 **名簿**、**規程**〕

- ① 医療従事者の先輩として、研修医への助言・指導を行う（特に、チーム医療、医療現場での実務について）。また、成長への見守りと支援を行う。
- ② 医師以外の視点から、研修医の評価を行う（特に、チーム医療はできているか、安全・安心の医療ができているか（医師としての適性）について）。
- ③ 医師以外の視点から、指導医の評価を行う（特に、指導医としての役割を果たしているか、指導医としての適性はどうかについて）。
- ④ 必要に応じ、メンターやプログラム責任者へ報告・連絡・相談を行う。

14 章：指導医の評価

1. 評価者と評価方法

(1) 指導医自身による自己評価

・「指導医 自己評価票」を使用。チェックリストと自由記載で構成される。→年 1 回（12 月頃）

(2) 研修医

・各診療科修了時の研修科に対する評価を、各診療科研修修了までに EPOC（チェックリスト、自由記載）へ入力する。結果は全研修修了後まで非公開とする。

・2人の研修医が指導医評価票を用いて、指導医個人に対する評価を行う。→年 1 回（12 月頃）

(3) 指導者

・「指導者→指導医（指導科）への評価票」を使用。診療科に対する指導分野別の自由記載アンケートであり、指導科の良い点、改善すべき点を自由形式で記載する。→年 1 回（12 月頃）

2. 評価結果の取扱いと指導医へのフィードバック

(1) プログラム責任者と実務部会は、評価資料を回収し、結果を整理分析する。

(2) プログラム責任者は、評価の総括を行い、その結果を各診療科指導責任者にフィードバックする。

(3) プログラム責任者は、各科指導責任者と共同して評価の結果を以後の指導に資するよう努める。

15 章：指導者の評価

1. 評価者と評価方法

(1) 研修医

・指導者の所属する各部署（歯科・口腔外科、看護部、診療情報管理室、薬剤部、放射線部、検査部、栄養部、医療情報管理室、医療安全管理室）に対する評価を、指導者評価票を用いて自由形式で記載する。→年 1 回（12 月頃）

2. 評価結果の取扱いと指導者へのフィードバック

(1) プログラム責任者と実務部会は、評価資料を回収し、結果を整理分析する。

(2) プログラム責任者は、評価の総括を行い、その結果を指導者の所属する各部署にフィードバックする。

(3) プログラム責任者は、指導者と共同して評価の結果を以後の指導に資するよう努める。

16章：研修プログラム全体の評価

1. 評価者と評価方法

(1) 研修医

- ・ 研修修了時の施設、プログラム全体に対する評価、全研修修了後に公開
- ・ 研修修了までに EPOC（チェックリスト、自由記載）へ入力

(2) 指導者

- ・ 「指導者→研修医、指導医、研修プログラム への評価票」を使用。各分野からの視点により、研修プログラム、研修医、指導医に対するアンケートであり、今後の改善に活かすために、辛口のコメントも含めて自由形式で記載する。→年 1 回（12 月頃）

(3) 研修管理委員会の外部委員

- ・ 年 1 回。2 月又は 3 月に研修管理委員会開催時に行われる。
- ・ 評価結果は、研修管理委員会、卒後臨床研修センター運営委員会、同実務部会に報告される。

2. 評価結果の取り扱いとフィードバック

(1) プログラム責任者及び実務部会は、自己評価（反省会）を行うとともに、評価資料を整理分析した後、改善案を作成する。改善案は、卒後臨床研修センター運営委員会並びに研修管理委員会で審議する。

(2) 改善事項は、当院運営委員会に報告した後、院内 web で公開するとともに、臨床研修協力施設等へも報告する。また、公開可能な内容であれば病院ホームページを通して一般にも公開する予定である。

3. 外部機関による評価

- ・ 第三者機関（NPO法人卒後臨床研修評価機構）の審査を定期的に受審し、プログラム全体の評価を受け、評価結果を踏まえてプログラム全体の改善を行う。

17章：研修終了後の進路等

1. 研修修了後の進路

- (1) 初期臨床研修を修了した者を対象とした1～3年間の後期研修医・専攻医制度を設けている。
- (2) 大学病院等の関連施設としては、当院の大部分の診療科において受け入れ可能である。
- (3) 募集は公募とし、面接の上、採用の可否を決定する。
- (4) 後期研修医・専攻医の身分は、原則、嘱託職員で（非常勤）である。

2. 研修修了者の同窓会組織について

- ・ 当院の発展に貢献し、会員相互の親睦を図ることを目的とし、当院の研修修了者による同窓会の組織を設けている。
- ・ 同窓会は、総務企画課に事務局を置き、名簿の作成や後輩の臨床研修修了記念文集の送付等を行う。
- ・ 同窓会は、5年に1回開催する（直近は平成25年度(平成26年1月2日)に開催。次回は令和2年度開催予定)。

18 章：協力型臨床研修病院としての研修体制

* 当院は香川大学附属病院及び岡山大学病院の各研修プログラムより、協力型臨床研修病院として研修医を受け入れている。

1. 管理体制

- (1) 各プログラムの規程に沿った研修を行い、当院での研修期間中は、当院のプログラム責任者が協力型臨床研修病院の指導責任者として、研修の手配などを行う。
- (2) 研修の休止・中断の可能性など何らかの問題が発生した場合には、基幹型臨床研修病院の各プログラム責任者に報告・連絡・相談する。

2. 指導体制

- (1) 研修目標、研修内容などは当院プログラム、各診療科カリキュラムに準ずる。
- (2) 当院での研修期間が 6 か月以上の場合にはメンターを手配する。6 か月未満の場合には、プログラム責任者又は実務部会がメンターの代行を行う。
- (3) 当院プログラムで使用している「2 年間の学術的研修記録」は、研修期間に応じた簡易版を作成し、CPC 出席、院内講演会への参加、研修医用レクチャーでの参加、当院における学術発表の業績を記録する。記録原本は、教育実績として当院へ残す。

3. 評価

- (1) 各プログラムの評価法に従って評価を行う。
- (2) EPOC を用いる場合には、プログラム責任者又は EPOC 管理担当者が各診療科研修における責任者を定め、「研修統括部門用メニュー」に研修期間の EPOC 評価者として入力し管理する。